

瀬川紀雄 ネット詩集
自然に、街に



風詩社

瀬川紀雄 ネット詩集

『自然に、街に』

◀——宇宙と地球に——

時空異変	……	3
二つの断片 存在の胚胎他	……	7
はがゆく	……	9
反誕生	……	11
光の底	……	13
◀——自然に——		
梵珠山	……	15
みみず	……	19
ふぐ	……	21
渡り鳥	……	24
詩人の高原	……	27
潮干狩り	……	31
葉雀	……	33
天竜の湖	……	35
頂と岬	……	37
カエルの詩	……	39
露色の雲気	……	41

(目次の項目をクリックすると本文の項目へジャンプ。その逆も可)

白い街	……	43
水浴び	……	45
単性生物	……	47
見えない焦点	……	49
人々とともに	……	
◀——街人と文化——		
空の蟻	……	53
深い宵	……	57
こぼれた音	……	59
凍った空間	……	61
——水木悟郎氏への挽詩——		
五重塔のある街	……	63
桜に満ちた城	……	65
子守歌	……	67
佐藤弘和独奏会に触発されて	……	
幻の田園都市	……	69
黄金色の稲原	……	71
父の土	……	73
シンフォニー	……	75

雪、雪、雪	111
―― 自省の嘆き	――
嘆きと希望	109
冷血	107
朝も夕映え	105
こわばり	101
カーキ色の行進	99
―― 文明を憂い	――
―― 新生前	――
砂身	97
毘	95
会場準備	93
卒業式	91
管理人補	89
ぼけ夏	86
申請書類送付	83
試験監督	81
夏の去来	77
―― 仕事	――

(目次の項目をクリックすると本文の項目へジャンプ。その逆も可)

あながき	155
初出概要	154
背の温もり	151
無の風	149
風の花	146
霧の中	143
古く中途半端でも	139
―― 小さな希望	――
アンニユイ	137
影人	135
溶体	133
冬の木	131
暗闘	129
ちぎれて	127
無業者の名	123
見えない軸	121
ゆらいで	119
形而上学的誘惑	117
落葉のため息	114

【在ることと意識】

——宇宙と地球に——

時空異変

時間が膨張しだした

細胞内が活発になり混雑してくる
リボゾームや顆粒がぶつかりあい
ミトコンドリアは熱くなる

核は激しく振動してしまった

そして全ニューロンが振動しあう

私はおまえたちは彼らは

興奮しふざけ合い踊り狂った

ひとときが長い一昼夜のように
一日は一生のごとく

そしてエネルギーを消耗し尽くす

ついに新幹線のレールはゆがみ

高速道路はよじれた

高層ビルはすでに崩れ落ちている

そして空間がひび割れた

航空機は墜落し

もう恵みの雨は降らないだろう

空間が萎縮しだした

表皮や臓器が混ざりあってくる

手足の挙動は封じられ

視覚がねばり聴覚が塞がれる

こころは激しく怯えてしまった

そして全ニューロンがもつれあう

私おまえたち彼らの識別は解消する
足の裏にブエノスアイレスが引っ付き
蹴上がりすると地球を一週する
南極やマントルにくっ付いて
死体が重なるように解消する

ついに瞬間が化石に埋没し
過去が未来を先回りした
置き去りにされた吐息は静まり
そして時間がつれ切れた
アイデンティティは解体し
もう追想することはできないであろう

突然、時間が萎縮し空間が膨張しだした
進んでも進んでも先は遠のいていく
岸辺に泳ぎ着きたいのに急流に流されていくかのように

骨粗鬆しては幼児に退化していき
そしてニューロンは伸び千切れていく
追いつかれた風は無となった
木霊は返らず空隙だらけの非在

二つの断片

存在の胚胎

意識があるゆえか身体が先なのか
いつまでも幼稚な思考に囚われながら
どこまでが私の存在なのだろう

さしずめ

さしずめ

いまの　これで　がまん
いつまでも到達することなく

目標は何だったろう

抱く必然はあったろうか

瞬間だけにさまよい

偶然　生れ落ち

たまたま生き延び

いま　何をしているのだろう
何をしたいのだろう

いま　どこか沼の隅で

泡がぷつんと消える

さしずめのまま死ぬ

はがゆく

からだの中を風が通り

ところが光った

あの日の一瞬を追いかける

観たく聴きたく詠みたい

だが ただ黙しつづける

なけなしの涙が空に落ちる

かつかそうよう
隔靴搔痒の思い

せめて 歩こうとしたら

宇宙に放り投げられそう

停止したまま浮き

牽かれていく
光を失った星へ

いつのまにか

凍てついた粒の尾が曳き
やがて 割れるだろう

けんれんかいかく
牽掣乖隔の翳りに

光よりも遠く遡行する星の
一瞬のまばたきを待ち

反誕生

長く街燈が立ち並ぶのは天の川

遠く家々の灯りがともっているのは星々

合唱だけはほんものか 早朝出かけた田園の通勤道路を戻り走る
だが ざわざわと幾声もの空念仏が不協和に上空に響く

アリストテレスが水辺を歩いてもう二三〇〇年

文明は進んだが時間は止まっていた

一〇数えるかのように たったの一〇倍で二万三千年前

そのわずか一〇倍で もう 這いつくばった人類の異形な祖先
すぐそこなのだ

さらに一〇倍のそのたったわずかの一〇倍で 古い沈黙の古生代
両生類の祖先たちは 今生きている化石と変わりない

どこかで 得体の知れぬ生き物がぴくりと動く

もう ほんのわずかの一〇倍で二十億年前
同じ四十六億年前に地球はなかった
なんという短さ 宇宙の神経がぴくり

百四十億年 ひとつ飛び

宇宙は昨日生まれた

ぼさつとしてるうちに はや地球は死ぬだろう
誕生の合唱が 吊いの読経となつてどこまでも
ざわざわと遠のきながら強まってい

光の底

風に風が吹く

虚空の色を聴き

眼を閉じ 呼吸の音を観る

ありえない無を 思念するよう何ものかに促され

無が無を包む

その無を さらなる無が包む

ずっと無であり続けながら 中心も 方向もなく

他の無もまた 脇から 横から 部分を包み

無と無が重なったどこかが揺らぎ

一瞬の閃光

それは点の始まりであったか

やがて あちこちに 泡のようにぶつぶつと

閃光のかたまり それらが迷走しては消え
いつしか蛍光となり 柔らかに連なり辺となる
揺れながら形は満ち あるいは他を拒否し
くつきりと粒子と広がり の 顕現

だが すべて中身は空洞であり 無なのだ
外形が重なって事物となり
長らく留まるが またしても無

事物はさらに重なり合い
巨視的な悠遠さとミクロの素早さが時間を生み
どこからか 命が生まれた
命は時間であり 無であった

風に風が吹き 無を無が包む
黒い光こそ 存在なのであろう
帰還するかのよう
ただひたすら 黒い言葉を探す

——自然に——

梵珠山

祖父を含む家族全員で

駐車してすぐカナヘビ

近くにオドリコソウ

以前小屋でみた蛇の話をし

あれほど騒ぎ

いつまでも言っていたのに

次男は記憶なし

登山道に木屑を敷き詰めている

次男は蛇を見たがる

長男からの質問

滑り台は昔子どもが小さい時に

近くにクルマバソウ

岩木山展望所で休憩

缶コーヒーとお菓子

近くにハウチワカエデ

次男出発を鈍る

祖父と長男どんどん進む

寺屋敷広場で次男ぐずる

カモシカの道と合流後コケイラン

帽子忘れ

山頂で蝶

カメラは電池切れとA F無効

ホウの葉で風車

カナヘビの取っ組み合い

登る時もウスバシロチョウ

水芭蕉の道

膝がきつくなり

真っ直ぐ下りるのが苦痛になる

道中笑いすぎたか
膝も笑い
真っ直ぐ下りるのに苦笑い





みみず

日が短くなりつつある夕べ

休日を惜しむかのように遊ぶ

庭先しかない庭に幾種類ものボールが転がり

母親が電子レンジの台所に立つ

夕餉の煙も匂いもないまま

誰も見ていないテレビが笑うなか

下の子が興奮して玄関に走ってくる

「でっかいミミズ、誰か来て」

しゃがんでじっと眺めていた

カタツムリのツノのように

ゴミがくっ付いていた

時間をどうとらえているのだろうか

永遠に地を這う小さな蛇は
ずうっと胴体を伸ばす

指の皮がはがれた赤い皮膚のように

「そこところ、気持ち悪い」

地表を泳ぎ冒険するより

土を食べていた方が

どれほど修験者になれることであろう
もぐらに襲われるの待ちながら

自家受精ではない

私も雌雄同体

ゆめうつつを交互に噛み

いつまでも両義性に囚われて

ミミズのように自家撞着

立ちつくし

煙草を吸いながら眠っている

時間がうしろへ吹き流れていき

何に襲われるのだろうか

ふぐ

夏に一度も来なかった

久しぶりの潮の匂い

押し寄せる波に向って

「おれは男だ」

弟も波に追いつ追われつ

「おれも男だ」

砂地を掻き回し貝を探す

窪みに大きな魚を見つけた

兄は浅瀬に逃げたところを素手で捕まえる

目の前でキュッキュツと鳴く

水に離れたら精一杯膨らんだ

「フグだっ」

腹に鮮やかな黄色い帯を残して

きらきら紺青の海原

岩場の端に並び立つとき

逞しい少年たちと映る

少年の私に海はなかった

遙遠な水平線

ただただ おおっぴらに広い

私もそうになりたい

千尋な海原

ただただ 赤裸々に青い

私もそうありたい

でも

小心はなお縮こまる

もう裸になる自信もない

膨れる胃袋は不満のガスだらけ

もう一匹の瘦せたフグ
いつまでも捕えられたまま

地球も

削られ圧迫され

どこかがぶくぶく

ふくれている

渡り鳥

白鳥の小群れが

枯れたたんぼの上を飛んでいく
行き先が定まらないかのように

大地が反射して

空にもう一つの風景があった

灰色の雲が織りなす広大な山々

山間に一つの湖があった

映された灰色の地球

地上を捨て

白鳥たちも理想郷を求めているのか

目立つのは国道

廃れた村々を切断し

たんぼをますます追いやる

ダンブと運送車が畑ごと積んで走って

鷺よりも威勢よく地面を飛ぶ

メダカどころかドジョウさえいない

留鳥たちも肌寒さに羽毛を引き寄せる

あんなに丸い眼を

閉じるのを忘れたかのように

いつまでもじっと

ここを故里とする渡り鳥たちは

どこへ行ったのだろう

こどもたちを遅しく育てあげ

もどってくるはずだった

いつもより寒い日々

上っ子が高熱で寝込んでいた

下っ子も母もハナをすすりだす

父はどうに咳き込んでいた

そろって布団をかぶり巢にもぐる

それも白日夢

巢ごと飛んでいるのだ

ずうつと渡り鳥だった

孤独を背負って旅立ち

いつのまにか妻子を従えて

どこに向かっているのだろう

詩人の高原

アルプスの山々を雲が隠し

見下ろせるはずの山々を霧が漂い

時折の小雨が残暑を押し退ける

人込みの点と点を結ぶ静かな草原の路

それは白い空間に浮かんだ中庸の世界

平凡な私たちには最もしっくりとした滲みであった

花々に彩られた美しい高原をとぼとぼ歩くとき

ザツクの肩の重みは確かに自分の重みだ

子どもが道の傍らに荷と腰を降ろし汗を吹く

マツムシソウのように淡く紅潮したあの顔

霧が静かに流れる広々とした峰をゆっくり登るとき

じわじわと濡れてくる腕は自分の感触だ

少年がどんだん先を駆けては振り返る



霧ヶ峰高原

アサギマダラのように透明な雨合羽を広げたあの姿
幽かに自分が見え他者が感じられ
全身で彼女をぎゅっと抱きしめたくなる

凡そ平らなところ 平野 台地 盆地

それらは建物が密集した仮装戦場

かりそめの日常に埋もられていながら

経済的裕福という唯一の正義を旗印に

サラリーマンという兵士は日夜誰と戦っているのだろう

息苦しい中、僅かに子どもたちの息吹を吸って生きている

凡そ平らなところ そうだ高原なのだ

家屋はなく自然のまま 幼少の頃に飛んでいた夢を結んでくれる

ほんとうの平凡は、高山植物のように

ここだけに残されているのだろうか

光りは唸らず 風は染まらず 小雨が素直に落ちる



ああ、草原のむこうを詩人ご夫妻が歩いている

「この大きな広がりと美しい静寂の中を、ただ二人行く」

ご夫婦の光りや雨のような天然の滋味を持った互いの思いやりとやがての避けることのできない哀別を覚悟しながらの深い愛情

「どんな見えも修飾もいらない。

そして二人はこの心、この姿で霧が峰を訪れたのだ。」

私たちもこっそりあとを着いていきたい

現実を逃れ　せめて理想の世界だけでも

追い風よ　ぶうつと吹いてくれ

注…□は、

尾崎喜八『高原のエッセイ』

(高橋達郎編) から引用





美ヶ原高原

潮干狩り

「おれ やってみたいこと一つあるんだ」

熟帰りに車の後席で突然言った

残業帰りにいつも立ち寄るのだった

小さなマウンテンバイクを後席に積み込んで

本業だけで時間不足な無能力な親子

どうせ だからもとの空っぽにもどりたいのだ

「一度 潮干狩りをやってみたいんだ」

あの半島に行ったことないな と去年の捨て台詞

連休は立ってみたい山のあるその岬を求めている

裏山ばかり歩き 海は露ほども知らない

潮干狩りはいつどこがいいのか

何もかも忘れ執着しないこと と思いながら

半島行きに下見もかねる多欲



宿のある岬への途上に 隠れた長い砂浜海岸
遠くまで幾つかの家族連れが光っていた
あさを獲っているという
わおっ 皆ですぐさま浅瀬に入り込んだ
どれも たてよこ綺麗な縞模様だ
私のような醜い皺ではない

「おれも 一つだけやってみたいことあるんだ」
いつしか血潮が干上がったとき
あとに何が埋もれているというのだろう
命に満ちた海にもどることなく 荒涼とした砂漠
おまえたちと一緒にすることはそのままに
「もう一度 人生をやってみよう」



葉雀

太い樹のまわりを
木枯し吹く雪の上
寒雀が飛び交う
が 枯葉だった

枯葉の舞いが一瞬鳥居の形を成し
幹が稲荷に化ける
ニホンオオカミの亡霊だったのか
地ふぶき 白い暗幕が張る



天竜の湖

臨海の大都会のひとつとよ 知っているだろうか
暗雲の上に いつも巨大な尾が隠れていることを
一撃で倒壊できる戒心の尾が見張っていることを

盆地の大きな湖面に浮かぶとき

蒼穹は 山々に丸く縁取られたもつと広大な湖

大地の泉から みどりごの愛慕がたゆたい昇天する

湖底に こころの滴をそそぐ山々

きらめく鏡におのれを映しながら 天を鑑み

深い森をいつまでも纏い 悠遠のまどろみ

高原の白樺の小さな湖に 舟をこぐ少年たち

湖面のやさしいゆらぎが地蔵の顔となり



碧天が弥勒の顔となって笑みに揺れる
花々に縁どられた湖 天の法をかたどる円か

そのまま のどかに周遊する天の川の白鳥となり

麓は快晴 美しき鳥瞰 山頂には雲が吹き流れ

少年たちは 白い強風のなか標柱にしがみつき

まるで 天に帰ろうとでもするかのように

それとも 未来に飛び立とうとしているのか

八部衆の山々 北の孤峰は 天に延び竜の尾となる

見送りの熱い眼差しを背に受けた

狸がよぎった山小屋の主は 仙人の姿をした竜だったのか

緊那羅がとこしえに奏でる温雅な調べの水底に 天竜の卵

黄金に化けさせようと大都会よ この地まではびこるなら

夜叉が天竜に乗り 醜怪な鬼神にもどって荒れ狂うだろう



頂と岬

あざやかな若葉にかこまれ 息吹を吸う
岬から松林の急尾根をぐんぐん駆け登って行った
喜びながら不安な親は追いつけない
シラネアオイの群落に黄花のイカリソウ
光がころころ転がっていた

やっとの頂に 標高を示した標識で待っていた
束の間のほほえみ みんなでの初訪問の感激
ノートにはいつまでも記録は残るだろう
ハエとアブにも踊られ
さて景色は 風とともに激んでいた

岬の宿 帰り際に海辺に日焼けした若女将
「私もあなたたちと同じ街の出身よ」



顔立ちのはっきりした美しさが 言い出しかねて
玄関先で朝日がひろがった

すぐ裏の看板はマムシ注意！ カモシカがじっとしていた

山道が消え 道なき山麓を急登

ひっそりとしたシラネアオイとツバメオモトの林から

緑色の岬を望む 青い空と紺青の海に白い灯台

野生の寒立馬がひたすら草を食べているのだろう

時にひよいと首をもたげ放尿しながら

岬には 海がいっぱい飛び 暇がいっぱい浮かんでいた

なしとげたことは 感激とともにすぐ忘れ去り

なしえないことが いつまでも胸にひっかかる

諦めをも あきらめたとき 脳のコアがまたひとつ消え

言いそこねていたことを 言いえぬまま

いつしか咽びながらあの世への峠を越え

深更に彼岸の岬に立つのだろう



カエルの詩

若芽にだろう山肌が薄い茶色に染まり
大山桜がやわらかな美味を添えている
来たるべき季節を告げるのか

木々の合間から沢の流れが下方に光る
林道の終点を目指して家族は往く
杖を持ち水戸黄門のご一行を真似ながら

水たまりに蛙の卵塊

太く長くとぐろを巻く

ひも状の先が水たまりからはみ出て

道の真ん中をまっすぐ延びる

春の陽射しがまばゆい

林道の終点は残雪で隠れていた



緊張ほぐれた帰り道だったが

はみ出た卵塊は蒸発し

残った卵が西瓜の種のように並んでいた

もっと先にじっとしているヒキガエル

その先のもうひとつの水たまりに

仰向けに死んだカエルが浮かんでいる

白い腹を剥き出しに

祈るかのようには前足を胸にあて

その下で小さなオタマジャクシが泳いでいた

自分たちに写す生誕と死

折り返し地点に何もない往来する生の道

そりかえり

大気をいっぱい吸い込んで

大きなカエルになって跳ね

ふあっと宙に浮かびたい



露色の雲気

確か夏だというのに 真っ青なあの快気はどこに
大地の精気は封じられたまま 鳥たちも藪に潜む
長すぎる温暖化に季節不順となり ずっと冬の空

風除室の引き戸に 大きな黒いカミキリが挟まれていた
どけようとすると 戸にちぎれた頭の触覚が動く
同時に 離れたはずの胴体も六本の足も一緒にうごめく
カミキリはどこへ行こうとしていたのか

家の裏からすぐ 深い雑木林になるのだ

忘れようと そぼろ髪のまま そぼ降る林道を走る

長靴 カメラ 凶鑑 捕虫網 水中網

なぜかバスケットボールまで待ち 衝動的だったのか

写真

薄暗い濡れそぼった道を歩く

道端の草むらにたくさんのアオカメムシとモリアオガエル
そう 数週間前にはアオゴミムシを初めて見た

でも、みんな緑色なのだ

葉上でか弱そうにエゾツユムシが 触覚を小刻みに振っている

ノシメはつかまえてみたものの カワラトンボに逃げられた

銀色に輝くように 青かった

道を歩き 家族でどこへ行こうとしていたのか

その先には 畑になるのだろう切り聞かれた私有地しかない

沢は農薬に汚染され 路傍は土ぼこりで冬のようなようになるのだろう

ペットボトルの虫獲りが枝にぶら下がっていた

労働の喜びを忘れた人口の罠に すべてが呑み込まれそうになる

生命を息吹かせるため 開拓精神があるのだったら

地気にリバウンドしたバスケットボールにつかまり

自然とは言いきれぬ あの陰気な雲むらを突き破れ

写真

白い街

しんしんと降り続ける

田地が埋もれ　りんご畑はおおわれ

道の境が消える

家々も灰色の壁だけ残す

ひとびとに混じり　裏山に登る

新春　信仰の篤い山だからではない

冬景色を味わうためにでもない

家族でただ登る

ガマズミの実はあまりにも紅い

リョウブの冬芽はあまりにも矢の穂先に似ている

そして　逃げ走った兔はあまりにも白すぎる

枝に積った雪は重く 幹にへばりついた雪は冷たい
吹雪き 何も見えない真つ白な空間

頂きは下界の景色を隠していた

一瞬 眼下遠く水墨画の山麓と街 影のようだ

やがて 開けて 光り輝く新生の街が浮き上がるのか
それとも ずっと幕が閉ざされまま

街が消え 一面雪の原と化するのか

白い空 白い街 そして身体 すべて同じなのだろう
しんしんと降る

見上げると 無数 静かにとぎれなく落ちてくる

雲のずつとはるか向こうから

足もとが回り 吸い込まれる

体が突き進んでいく

雲のずつとはるか向こうへ



水浴び

幼いとき描いたような空

透明な青が無限に重なってなお澄みつくす

炎天に魚類への回帰を呼び覚ますのは水天の業か

足裏が熱い砂浜や風の住まう磯で泳ぐ

青い海が空につづき小波と白波

山に囲まれた湖水でも泳ぐ

遊覧船に波立つゆるやかな揺れ

だが 少年のときのようにまず

川や沼で泳ぎたい

水泳より水浴びだ

もぐって雑魚の群れを散らしながら小石を拾い

浮草をかきわけて波の揺曳をなす

写真

だが いま場所がなく

あっても気味悪さに物怖じするだろう

働くことに溺れ 休日に藁をもつかむ思い

かつて村の少年が河原で溺死した

手をはなすのがこわい

せめて

波打つエネルギーを体液に響かせたい

単性生物

無性生物のように小さな口々に浮く
地中の微生物のように半透明な行為
便宜という名の怪獣にかきまわされ
瓶の底に取り残される
心の底に穴があき
命の中に雨が降りつづける

ああ 束の間の
生命のそよ風ゼフィルスよ

春の陽炎スプリングエフェメラル
林が葉で覆われる前のわずかなあいだ
カタクリ畑に花蜂が飛び交う
やがて蟻が忙しなく歩くのだろう



朽ちた幹から落ちたのはオサムシだった

胸赤い大きなマイマイカブリだ

背が底光りする緑色のキタマイマイカブリ

尾根の雑木林に立つと 遙か虹

青空のちぎれ雲に煌びやかな彩雲

それは 風の七色

さらに上に逆さになった虹 大きな光環だ

ああ 束の間ともにいたゼフィルスよ

妻も子らもともにいた

重くも 軽くもない 日々

モノクロームの人生が事物の影に溶けていく

名もない微生物に宿り

原核にほどけ一個のレトロウイルス粒となる

ただ 化学反応があるだけだ

命は地底に流れマグマに蒸発するのだろうか

見えない焦点

いつごろから求めたのだろう

はるか頭上のつかみえぬ真理を

いつも背に隠れる真実を振り向きつづけ

内にじっとひそむ本質をほじくり返す

なぜ

過ぎ去った少年にいつまでも追憶を積み重ね

星 光を探そうと反射望遠鏡を持ち出す

雲 触れたいと山に登り

石 語り合おうと道にかがむ

草 秘密に耳をそばだてようと路傍にしゃがみ

虫 わずかな動きを接写し

鳥 一瞬の陰影を望遠レンズで焼きつける

そして 心 光学顕微鏡で成り立ちを覗きたい

世界はすべて七不思議だった

宇宙の闇の何と広いことか 怯え

大気の変幻と壮大な循環に震え

存在の不可解さに慄く

そして 命のただ存続のための儂さを憂う

命はひとつの単細胞生物だった

おそらく 純粹な

オリオン大星雲 M 42 雪の角柱状六花 地中からの輝石

命さえ忘れ 人々は地表で金貨のために武器を磨く

花卉 触覚 眼光

それら生の輝きこそ 地上の難民の子たちに贈りたい

人類ほど まずい生き方を選んだものはなかった

心はどんな結晶だったろうか

身体は曇ったままの鏡

知覚は途切れ 逸脱し

不可知の苦しきから創造は錯乱する

論理なく言葉足らず練言ばかり

他者のイメージに委ね

詩という卑怯な手段にしがみつく

何よりも 自らのイメージを絶ち切るために

形態を脱ぎ組成を剥ぎ裸心となるために

どれだけの血を流すのだろう

どくどくと 体感だけが実在する



【人々とともに】

——街人と文化——

空の蟻

三車線のただっぴろい国道
通行止めの規制が敷かれた
ねぶた出陣前の午後の静けさ
でっかい葉っぱの切れ端を囓んで
けんめいに運ぶ一匹のアリ
国道を過ぎろうというのか
方向を間違えていないのか
路傍を探すも
巢どころか仲間の一匹さえいない

黙々と進む

自分の足音をどう聞いているのだろうか
せつせと歩く

前足でちょこちょこ左右を探りながら
向こうは歩道であり

コンクリートの商店が建ち並ぶ

村の小さなねぶたは

七日日の午前 最後の練り歩き

石を投げられ穴のあいたぼろぼろの扇ねぶた

七日日の午後 灯籠流しの意味だろう

骨木だけは来年に残し燃やして河原に流す

足元にはたくさんアリがいて

踏まれてもつぶされない

送るみんなのずうっと後で

貧しい人が待っていたのだ

薪を拾おうと

大きな人形ねぶたと小さなアリ

村のねぶたが消えたように

跳ねとに踏みつぶされるのだろう

出陣の花火が打ち上がる

すうっと力が抜け

提灯に火を点ける

とうに冷めた偽りの興奮

沿道には不気味な仮面だらけ

浴衣に付けた鈴の音を聞きながら

ずうっと空を見上げつづける

あのアリが青い原っぱまで歩いていようだ

青森ねぶたの

写真

深い宵

境内の路上に出店の裸電球が並ぶ

どこかで笑い声がさびれて

誰もいない金魚すくいに夜気がなよぶ

和服姿も下駄の響きもなく

仏利の名前だけにいにしえが漂い

親子でお参りしながら

しあわせの向こうに佗しさが佇む

大きくなつたから

老いたからだろうか

叙情のすがれた飛石を踏む

仏壇の父がいつまでも若いように

こころの泉を持ちつづけたい

宵宮の写真

せめて 天水桶に寄りかかり
あんぐりと宇宙のひとしづくを

吸ったのは闇 吐き出したのは諦念
湧くものもなく天恵もなく

三門を潜るとそこだけが残された地球の世紀末
みずからの死のための宵祭り

幼女が閃光花火にしやがんでいた

世代間戦争のただなか

文化遺産も自然も守ろうとしなかった
もう とうに宵月夜

せめて 何もせず 黙して路をあける
若きひとびとが通るために

こぼれた音

最初の和音が鳴った

あとが続かない

しいーんとする

もう一度同じ和音が鳴る

また あとが続かない

しいーんとする

三分三十三秒か

音が背を丸め ふてくされる

オクターブ下がり ばらばらと流れ

ジャズのようにぶつぶつと濁る

鍵盤が分からなくなった

いきなりのグラランドピアノに戸惑ったのか

発表会の写真

すばやく豪快に弾き出した弟も
終わりで音符の数珠が折れ 間が生じる
学校の休み時間にドッジボールで壁に突き指
しばらく練習していなかった

路頭にさ迷ったらザ・ピアノで漫才でもと
最後のチャンスの連弾も

力強くもテンポがずれ ちぐはぐなリズム

多調の上を変にシンコペーションが跳ね

途中で見合った照れ笑いが照れる

おれの人生のようだった

蹟き 回り道し ますます離れ

小さな小さな人生の課題曲に

親と共にいつまでも初心者のまま

おまえたちの先も知れたもの

ただ 静かに拍手する

凍った空間

— 水木悟郎氏への挽詩 —

真冬の深夜に前ぶれなく

親友の親友が逝った

生涯ビル・エヴァンスを愛し

スナックの名もエヴァンスだった

単独登山が好きだった

とくに岩木山を

赤倉神社のコースを

お地藏さまが立ち並ぶ山道

今も登っているのだろうか

スキーの上手い読書家だった

離婚したまま自由だった

ジャズに耳を傾けながらグラスをもち
不満をぶつつけられた唯一のカウンター
泣きわめくことのできた唯一のマスター
いつも素敵な笑顔だった
街からダンディーが消えた

親友が仕事帰りに後片付けをする

スナックに夜風が吹き

エヴァンスは逝く

ベースを弾く指が止まり

ドラムの椅子に誰もいない

最初から楽器のないトリオの

余韻がゆれる

突然、室内の空気が凍りつき

アドリブのように

割れた

五重塔のある街

深い闇のなか 高台の木立の合間に五重塔が浮く

雪道の凍てついた足音に 境内の温かい灯りがなぞむ

雪の原も化粧したように照れ

落成したばかりのように初々しい五重塔

行く年の無量の憂いを葬りながら

初詣に待ち並ぶひとびとに除夜の鐘が響く

どこからとなく秒読みが始まり 次第に高揚する

百八つつ目の煩惱が撞かれ 来る年の歓声

その後の沈黙に ひんやりとした空気が一層凍える

遠くで花火が打ち上げられ

五重塔の傍らに美しく華開いた

石段の下にリヤカーの焼いも屋

迎えた干支の鳴き声のように響く

こよりにした御神籤をさわらの葉に縁結び

松明に手をあぶり 新年の厄除けの鐘を撞くと

一台の扇ねぶたが灯りを揺らしながら通り過ぎた

大飢饉を引きずった米と落下を怖れ続けた林檎だけの

みちのくの小さな城下町は 沈んだ単色のパステル画

いにしえの学都に学者たちがひっそりと住み

こじんまりと 街々の展覧会と音楽会

詩人たちが 朗読のあと地酒に静かに集い

じわじわと奥行きが滲み出て

かすかに彩られた深遠な水墨画になる

どこからか赤子の泣き声が聴こえ

五重塔は 今宵も闇の街を見下ろしている

桜に満ちた城

花びらが軟らかい風にそよぎ桃色がひるがえり

水草の外堀に 日本一の太さを誇る染井吉野の並木が映る

春の陽気が 南北の大手門や町家に通じる東西門をくぐる

さくら咲け さくら咲き さくら咲く

枝垂れ桜の連なりが覆いかぶさる西堀に

幾槽もの手漕ぎボートが浮かび青春の声々

三の丸や東西南北の外丸に桜のトンネル道と桜の広場広場

莫産を敷いたあちこちの家族や仲間たちの声々

護国神社の前は八重桜の園 お化け屋敷や出店が並ぶ

陽気は 水鳥が遊ぶ中堀の大橋や土橋を伝って内門をくぐる

さくら咲け さくら咲き さくら咲く

二の丸や四方の内丸に ひっそりと四隅に三層の櫓

最古の染井や古木の霞桜がたたずむ

与力番所や太鼓櫓と靱蔵や北の曲輪に城中の足音が聞こえる



内堀の向こう 石垣の上に凜と建つ三層の白壁天守閣

陽気が 擬宝珠がついた赤い欄干の下乗橋を這い渡ると

染井も枝垂れも地面まで垂れ 桜咲く 桜咲く

五層の天守閣が落雷で焼失した本丸は高みとなり

蓮池を見下ろし中腹まで残雪に覆われた岩木山を間近に望む

今年も長い冬だった 忙しくなる田植えや受粉に向けて

苗代の準備やりんごの木の剪定を終えた農夫たち

地酒と漆の津軽塗り重箱を持ち寄って憩う

年度変わりに疲れたサラリーマンも

流しの民謡と三味線にこころを癒す

公園で幾度か夜を過ごした青春

出店やポート場で寝泊まりバイトをした学生時代

こころの白紙は 文字をつづるものではなく

桜の色を滲ませ香りをつけるべきものかもしれない

いま改めて じっと白紙を見つめる

子守歌

佐藤弘和独奏会に触発されて

まだ日長に宵闇は明るさが残り
夜の帳が下りると星がきらめく
浄土寺院の奥庭に池と築山の影
座敷前の広い芝生は高原を写し
ライトアップに言葉なき弾語り
端嚴なバロックと愛慕の夜想曲
キリギリスの声はいとど高まり
庭園の外で子どもらが歓呼する
遠く幽かな花火と耳もとの羽音
自作自演に家庭の唄が合奏する
池の辺で古代ギリシアのリュラ
築山の岩でルネサンスリュート

温雅な調べに旋律が透明に響く
子守歌にマリアのかいな現われ
幼子たちが宙に浮いて安眠する

楽器なくいつまでも中世の吟遊
心の揺れで空気分子を共鳴させ
喘ぎを遙か地平線まで広げたい
頭上の宵闇にギターの形が映り
あれは 懐胎した若きマリアだ

こもりうた

母はどんな子守唄を歌ったのだろう
妻の子守唄はよく知っている

ほくは誰のために詠えるのだろうか

夜更け 至心の文学を読みふけっていると
そっと妻子の寝顔をのぞきたくなる
虫の音やまず ともに永夜を願う

幻の田園都市

春 平野一面 きらきら光る水田の湖

丸木を削った帆船に空想が乗って波をかき分けていた
巨大な鏡となって青空を映し

軟らかい白雲と対話していた

言葉は風だった

夏 三方は山々 その裾野が延びて広がる青々とした田園

畔の小川でハグロトンボが夢をひらひら飛ばせていた
深い緑の絨毯となって夜空に幅射し

おぼろな半月と対話していた

生命は水だった

秋 黄金の稲原 鮮やかに中腹まで散在する林檎園

イナゴのコロニーを聴衆に秋の虫たちと合奏していた

錦繡の大地となつて星々に反射し

去りゆく天の川と対話していた

精神は地だった

冬　すべてが平らかな　原初で終末の白銀

自然の銀盤を滑つて幽かに枯れすすきを揺らしていた
事物の境界のない綿雪となつて蒸発し

こもる宇宙と対話していた

思想は火だった

今　時代に取り残され　この広い盆地のような津軽野

十四の街と村がひとつのころを形にしようと

その夢も　ひでりのようにひび割れ　背を向け合うのか

津軽弁の会話はとぎれようとし

こころのおくからどつと　暗雲の大洪水

黄金色の稲原

天目が雲にこもり寒い日々だった

冷夏のまま十年ぶりに米が不作

間引きや身売りの過去に怯え

世界のあちこちの飢死に震える

地中に埋もれた幾多の稲子たち

群れで襲う害虫ではなかった

人間こそ岩盤まで蝕む巨大なバツタの大群

食うべき量と質を問うのも気づまりなまま

収穫は減るがどうにか津軽も遅れて黄金の海原

苗で描いたモナリザの絵もカラフルに稔り

お城の形をした役所の天守閣から望む

弥生の古代米を児童たちが鎌で刈り

故老たちが藁で縄と苧を編んでみせる

ひね米と混ぜた新米がやがて延の上に餅となり

縄で結ばれ干餅としてぶら下がるのだろう
祭りごとの初源をいままた祭る

夫を亡くして久しい母

実兄が代わりに運転するコンバインに乗り

粃で満たされた米袋を詰めて落としているのだろう

鼻がごみでいっぱいになった遠き日々が蘇る

勤皇の志士の形に結った立て掛けや棒掛けの稲

子らは背負い集め母の前にいくつも積んだ

覆面した母が稲束を差しのべ父は脱穀機に入れた

夕日が落ちる頃に遠くで藁焼きの煙か上がり

子らが落穂を拾い義祖母は箕でからごみを飛ばしていた

津軽もどろにか黄金の海原

海原を縫う長距離通勤路を往復する

占希をとうに越した母に手伝わす

電話がくるだろう「新米もらいに来なが」と

出勤の朝日に稲穂の波がまぶし過ぎる

父の土

暑いねぶたも終わった孟蘭盆

屋敷裏の狭い畑は 田圃に面し涼風が透き通る
無農薬だと 母は好物の枝豆を掘り茄子をもぎ
子は教わり 玉蜀黍をもぎり西瓜の蔓をちぎる
ただ煙草をふかしながら騒々しいバイパスを睨み
河原の土手までくねくねした道の日没を懐かしむ

離れの便所は板張で 姐虫がうようよしていた

見下ろすと様々な昆虫も落ちていた

かき混ぜ桶に汲み 天秤棒でかついだ堆肥

林檎畑 色々な野菜と果樹 そして溢れる草花

愛玩動物に加えて牛 鶏 兎 豚 馬の賑い

父は苗代にも土を盛り 畑を広げた

隣村との中間にある田圃を買った

そこに蛇塚という小高い丘があり石碑があった
天明の大飢饉で多くの餓死者を葬った小墳墓
交替した所有者いずれにも不幸が纏わっていた
父は 丘を削って屋敷の畑に土を運んだ
屋敷裏に造った作業小屋から落ち 死んだ

仏前は 蓮の葉に茄子の牛と胡瓜の馬

質朴勤勉だった父は 若くいつも微笑んでいる

言葉は陳腐だが 取り立ては実に美味しい

この春 蛇塚は町によって史跡とされ保護された

妻子と共に訪れ 石碑を拝む

自らの無知による罪を懸念しながら

シンフォニー

林間に冷ややかな陽射し 紅葉の日没は静かだ

巨人の指揮棒のもと時空の休止

やがて焼けた雲が迫りどこからか暁の序奏

シンフォニア サンフォニー 何に向けての序曲か

悲劇へ 喜劇へ 人生の曖昧な暗示

世俗の陽気な急と 気高くもメランコリーな緩

メヌエット調にホモフォニーが奏でる

生の喜びを覚えては愛にうとおしく死に不安となり

ついに管弦楽が咆哮し シンフォニー

内なる深遠な宇宙へ発散するのだ

前古典派から環境音楽派まであまたのシンフォニーを聴き

無数のシンフォニーが様式を超え不協和に交雑しては共鳴し

脳からはみ出て　それでもそれらを総合したひとつの
凡夫は頭の中で壮大なメタ・シンフォニーを響かせる

音響のスペクトルを思考し超ミニマルな微音を夢想しながら
倍音を加算し二声多声へとフーガを成し

コスモスという対位法にまで感応するハルモニア

新たなマニエリスムと回帰しよう

ポリフォニックな束がひとつの旋律となつて

宇宙の鼓動に乗り果てまで流暢に透き通る

メタ・シンフォニー

音楽創造の源泉か

巨大なメタ・絵画であつた昼の裏で

夜は、創造の源泉でもあろうメタ・シンフォニーの世界

内奥のホワイトホールから次々と序奏が湧き上がってくる

私は一個の楽器　私は巨大な交響体に膨らみ

CDプレーヤーが止まった眠りの中で永遠に鳴り響く

虫の音は年々減っている

夏の去来

自然の滋味に掬すべき
謳歌した夏の陽射し
いきなりの強い秋風に
儂く遠ざかり
栗の木が大きく揺れる

車四台の玉突き事故

信号停止で後方から追突されたのだった
みんな仕事帰りで家路を急いでいたのだ
首をさすりながら思い思いにじつと稲穂をみつめる

車間距離はブレーキはと尋問

街で起こった金融機関の強盗未遂放火事件

悲惨にも五名が焼死した

おさなごが保育園で母を待っていたのだ

逃走車も似顔絵もお父さんそっくり

遠く離れた職場の私にも尋問に来た 出勤簿は

交通網が発達し運輸が敏速なだけ

増えるのは事故、犯人未摘発率、犯罪

ああ、お巡りさん、僕は何にもしておりません

国立情報学研究所からまとめ書類の提出催促

日々気にしながらちようど締切日に提出した

文部科学省と日本学術振興会からの注意

科学研究費補助金申請まとめのタイプミスだった

津軽弁は会計監査院の目の前で口ごもり

書面の不合理な単位計算を説明できなかった

悲しいかな便宜なはずのパソコン

様式もすべて自作、表計算ソフトにこんがらかる

レイアウト直して紙屑を増やしなが

ああ、お役人さん、いったい僕は何をなしたのだろう

でも みんな同じサラリーマン

権限をかざし違法してはいけない

信頼を裏切り公費をくすねてはいけない

みんな労働者なんです

深夜遅く お巡りさん

書類に埋もれ お役人さん

お疲れさんです

でも 私も もっと 何のための職務

短い夏だった

あんなにそわそわ待ち焦がれていたのに
最後の通り雨が笑って行つた

いが栗がぽつりと落ちる

未完の夏のようにまだ青いまま

試験監督

清掃でだけ馴染みな教室に立ちづめ 自分が作った問題ではない
心も思考も萎えた木偶の坊に 葉をそよと窓の樹木が蔑視する
腕章の窮屈を胸まで絞め 壁時計をわき目する気乗り薄いしぐさ
欲しかった静けさなのに 眠りに陥るように時間が遠のいていく
透明な沈黙のバリアーにくるまれ 転がり落ちた消しゴムとなる
そして 己を 消し 尽くす

かつて キャンパスの前期、学年末試験で

学生のカンニングを防ぎながら、自分は小さな紙切れを握りしめ
こっそり覗き込む たくさんの文人 作品 流派の名前を復唱し
かつて 教師まがいのとき

作題を楽しんでは喜ばしげに監督 生徒一人一人の顔を覗き込む
視線が合うごとにつこり 正解がうれしく大きな丸をつけさせた
子どもたちに不思議な問いを生み出させ 調べ考え応えは元気に

拍手をもって仲間に入る　そこに一つの詩が生まれていた

テストが嫌で気が重くなりながら

公式の意味をあれこれ考え　長文の行間を味わい何度も読み返す
計算はせず語句もなのまま　時々窓の木々を眺めチャイムが鳴る

映画　舞台　音楽　どの監督もみな作家　あれほど憧れたのに

いま　何も生み出せない　ただの被験者

受験者に素性を探られ見張られて　試験者に実務能力を試される
センター入試　業者試験　でも一度も人を試したことはなかった
「答えのない質問」アイヴスの曖昧な不協和音の中をぐるぐると
「設問はすでに解答である」分析哲学の捨象を呑み込めないまま
いま　己を採点すると　どんな解答があるのだろう

上空をジェット機が通過し　幻覚に襲われて雷光が試験室を走る
樹幹からカラスが覗き視線が合い　解けない焦りが強張っていく
他人の不安な緊張をも自分の中でぶり返して　end of recording

鉛筆を置いてください　一緒にこの人生の試練も

手を下ろしてください　抜け殻の私を回収します

申請書類送付

切手になって旅をしたい

みずからに描かれた風景を求めて

それは 少年の夢だった

異郷の人々の優しい手に触れ

波ぎわを伝わって島々を眺め

湖畔にたたずんで山々を望む

いつまでも消印のないまま

人と人を結ぶ切手の夢のように

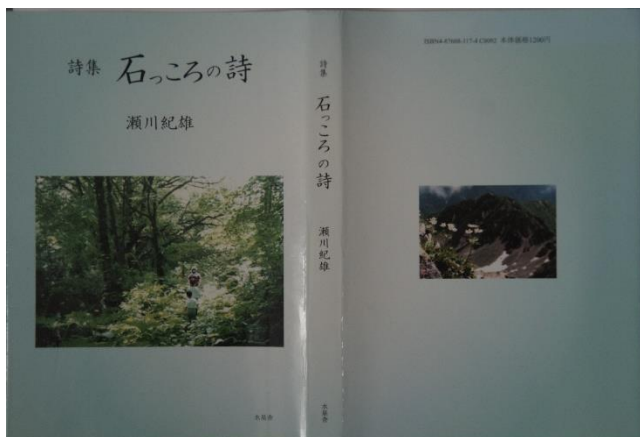
ひとつひとつ添え文を入れ

第一詩集 赤い筆で謹呈

封づめにわくわく舌でぬらして

ふみの日 文化人切手

やがて切手が心温まる便りを運んでくる



いま もう一人の私が
調査に対する回答どころではない
教官の研究費補助金とりまとめ申請
事務的ミスは許されない
宛名は筆ペンで習字のごとく
でもないすべて綺麗にタイプ打ち
夜更け帰りがけ緊張したまま宅急便へ投げる
ああ、切手はいつ落ちたのだろう
携帯電話と電子メールの時代だ
もうパソコンでテレビ電話
せめて紙の節約といいながら
何枚もカラープリント
孤独を恐れず質素に
普通切手が記念切手としてリーフに収まるように
こころのアルバムを閉じよう



もう そろそろ
私を荷造りして
投函しよう
宛名もなく
一枚の切手となって



ぼけ夏

自然の滋味に掬すべき

謳歌した夏の陽射し

いきなりの強い秋風に

儂く遠ざかり

栗の木が大きく揺れる

少年の 縄文の臭いを漂わせながら

四台の玉突き事故

信号停止で後方から追突されたのだ

車間距離はブレーキはと尋問される

我が街で起こった金融機関の強盗未遂放火事件

五名が焼死した悲惨な事件

遠く離れた職場の私にも尋問に来た

ああ、お巡りさん、僕は何にもしておりません

国立情報学研究所からまとめ書類の提出催促

日々気にしていながら締切日が過ぎてしまった

文部科学省と日本学術振興会からの叱責

科学研究費補助金申請まとめのタイプミスだった

悲しいかな便宜なはずのパソコン

様式もすべて自作で表計算ソフトにこんがらかる

タイプミスとレイアウト直して紙屑を増やすだけ

ああ、お役人さん、いったい僕は何をなしたのだろう

案内をもらいながら森のキャンプの申し込み忘れ

海水浴にも一度も行けなかった

隣り街の惑星美術会の展覧会に行きたかった

まだ一度も行ったことがないのだ

セビリヤ交響楽団の入場券を買っていないながら

当日すっかり忘れ街の音楽会に出かけてしまった

ああ、いったい僕は何をしていたのだろう

短い夏だった

あんなにそわそわ待ち焦がれていたのに
欲が多過ぎたのだろうか

管理人補

脳の中空から無数の懐かしい雪が降りそそぐ

管理者から管理された管理人補

さらっとしていたものが いつしか雨となってこころに溜まる

屋根から雪が落ちそうだ ストープが故障した

施設の維持補修や設備の保守点検

スコップに腰が辛く除雪ダンプに手首が痛い

まずは緩んでしまったこの骨をスパナで締め直して

教室の電気が点けっ放しだ 会議資料の印刷製本は無駄なく

エネルギーの木目細かい節約や消耗品の可能な保持

夜の蛍光灯に目がちらちらし誤字の訂正で何度もプリントし直す

何よりも脆くなったこの使い捨ての首をつなぎとめようと

昔の文書をやっと探し出し 申請できぬ起案は破きポケットを探る

各種書類の整理保管や実験実習費から各種補助金の経理把握

乱雑なまま宿題のみ重なりその重みに押し潰れそうになる

ああ すつきりとこの身もパンチで穴をあけファイルに閉じたい
業績一覧表や行事参加者名簿を作り 出席率が落ちる時間割を避け
教員の調書作成から動向把握 そして学生の看守指導

遅刻に神経を磨り減らし仕事の残しに不安を覚えながら

そう 往復をヘッドライトで照らし走る私は登校拒否にかられる

あつ 連絡を あつ 提出するのを忘れた そしておのれ自身をも

管理者と被管理者とから両端をつまれて糸がピンと張られ

真ん中でくるくる回った宙ぶらりん もう放たれたい

目の前にどっしりとふるさとの山 郷愁を誘う岩木山が聳え立つ

幾度も訪れた広々とした真っ白なゲレンデ その頂きに家族で並び

思いっきり滑り込み 岩木山を越えるほどにジャンプしたい

もともと唯一宇宙のみから管理されていたはずだ

おのれさえ管理できず さあ 骨をはずしファイルに閉じ

せて魂だけでも もどろろ 中空へ

卒業式

ヒマラヤの氷河でさえ温暖化にやられているという

地球の涙によつてか

いつもより早く純潔な雪が溶け 径はぐちやぐちや

景色がしぼんだまま またひとつ儀式が終わろうとしている

つい先ごろであつた入学式が いつしか卒業式

求めていた蛍の光が霞んでいき

息子が小学を 姪が高校を 他人が修士課哩を

別れに感涙の少年 出立に笑う女生徒 マンネリにふざける青年

明確であつた正負の磁極が表裏一体の電極へ 生命のエントロピー

角帽にガウンを着し黒づくめの追い出しという門出

背後にネクタイ隠しを春風になびかせ 束の間のまた遅すぎた青春

学位と証書を武器に不況の中へ新たな入学式

中間がないのは乏しい自分の意識か

水晶体は曇り虹彩はじつとしたまま

次々と資格や免許の取得を繰り返す現代人

成績を競いスポーツで争い 趣味は金銭に工面させられて

名誉と賞賛を浴びたいどころか 遊びまで競争する性

気づいた時には皆老いていた

何もないはずなのに 書類完成という終了式ばかりに追われ

雨のように降りかかる指令という入学式を何度も受け

千たび死に返り 仮の門出にいまどこに吉の方角があるう

私の本当の卒業式はいつか

必修科目の「仕事」の単位が修得できず

いつまでも遠い祖先を忘れた留鳥のよう

授与されるのは感謝状などではない

除籍という辞令書かもしれない

死神から届く人生の卒業証書

この世の卒業式に せめて命の一縷の光を発したい

会場準備

季節の変わり目や週始めに対してどころか

おのれの準備もできず

整髪も歯磨きも不十分なままネクタイをつかむ

昼食会の陽光

お弁当注文に配膳しお茶をそそぐ窓辺の笑み

楽しく高邁な談話を隣りの給湯室で拝聴する

応接室がおつゆのお椀に見え ほのかな湯気

講演会場の灯かり

案内板や垂れ幕を華やかに液晶映写機を運び

出席者を確認しながら学問に耳をそばだてる

スライドやOHPにここは奥義伝授の密室か

学会会場の光線

不足の机とテーブルを満たしても日本は広い

タイムオフのベル押しに係の白分で目がさめ
原子力の専門語に私は海外へ飛ばされていた
地球の反射

そこで人類は何の準備をしているのだろうか
妻子との「合い」だけを求めている単独者に
あまりにも広い

ああ いつしか 心をこめた小さな最後の準備
ただひとり みずからが会葬者として
廃れた倉庫か礦野がふさわしいだろう
扉を閉め窓の暗幕を閉じ 鳥葬と風葬
銃はないが 紐 剃刀 睡眠薬 劇薬
光なく 敷いたゴミ袋に座りじつと眺めるのか

そして いとおしくすべての場を捨て
非常口へ家の門へ走り逃げるのだろうか

罨

真夏を誘う気だるい午後

ガラス戸が廊下を満面に照らす

切れども切れども咲くバラを覗かせ

軸の刺さった薬指が痛む

ごみ虫が屋内に紛れ込んでいた

廊下の真中から隅に寄る

壁に塞がれ隅だけを進む

角に見えないクモの巣がきらりと光り

モンシロチョウの屍骸も落ちていた

糸に絡み、もがくほど吊り上げられていく

クモがどこからとなくするする降りてきた

体をねじり、もがく

クモが近づいたとき

体重が重なったかのように　ごみ虫は落ちた
難を逃れたら

もつとたくさん巣が張られた先へと進む

小物はどこで

巣に引つかかったのだろう

何の巣か見えないまま

確かに吊り上げられている

もがくこともなく運命が近づくと

ぶつりと糸が切れ

どこへ向かうというのか

砂身

世界はあんなに晴れ跳んでいるのに

朝 車を降りると腰が凝り前かがみ

杖があるともう老人だ

足元をじっと見つめ 控えたネブタが辛い

長時間また椅子に縛られるのか

空はあんなに澄み涼しそうなのに

暑い机上で 森の中に開いた満天の星辰を追憶

もっと北の果ても体感暑さから逃れられない

北回帰線はどれほどだろうか

時間があちこちぶよぶよと止まっている

窓を開けた教授の研究室に雀が迷い込む

濠々とした眼で窓硝子にぶつかり

弱った体を両手に抱え逃がそうとすると

不意にカラスが襲い雀の頭と首を突つつく

血に両手を引っ込め 落ちて そして死んだ

白昼夢 頭と首が闇に突つかれる

指令が破け 首という橋が壊れ

縮こまり固まる身体には届かない

どうせ とうに ころはひでりだ

せめて 割れ目から雑草よ這い出でよ

しなやかな雑草よ

私の原身体はどんなものだったか

砂漠でも深海でもない さらにさらとした闇

光も広がりもそこから生じなかった

気づいたとき すべてのものが外からだった

構築されたはずが砂上の楼閣

新生前

初冬、黒く低い山際の上に鋭く痩せた三日月

向かって走るフロントガラスにへばりつく

冷たい鎌に斬られそうで おぞげだち

まばゆい輝きに溶かれそうで こわけだつ

強くまばたき 山際に眼を見開き直すと

三日月は何度も落ち沈むように動く

プロメテウスのついでにばまれた肉片

シシュポスの永遠に反復する落下

振り向かず走ってきたが どこからだったか

思い出した 時間を落としてきたのだ

青年の終わりに 壮年のさなかだったか

そのへとき の時 一瞬に時間が止まったのだ

時間を甦らせ いっそのこと創ろうとした

形ができそうになると 途端に粉々になる
それら破片をあの〈とき〉が吸い込む
時間を探し始めると 枯骨ばかりが浮き
あの〈とき〉が死を意味することを告げる
すべては すでにそこで途切れていた

行き先もなく 今どこを走っているのか
やって来る冬は また過去の冬であり
今見ている三日月は 失われた月だった

——文明を憂い——

カーキ色の行進

駐車して繁華街の通りに出た

自衛隊が隊列をなして行進して来た

先導隊に何の幟もない

何のための行進なのだろう

楽器を鳴らさず抱えて歩く軍楽隊

高層ビルやホワイトハウスに

同時多発テロを受けたアメリカ

黒幕の指導者をかこうアフガニスタンへ

報復攻撃を加えようとしているとき

片田舎の小さな街で

カーキ色の隊員が黙々と行進していく
枯れ草色はコンクリートに相応しくない
ヒンディー語で「土ぼこり」の意味は
舗装道路に似合わない

何が国防色だろう

まばらな通行人は啞然とし

やがて小走りに街角を曲がる

隊列はスタスタと

猫の忍び足のように不気味だ

装甲車だ

市長はなぜ許したのだろう

路傍の掲示板にポスターが貼っていた

自衛隊創立幾十周年記念パレード

ばかな　こんな時に

戦争下に喘ぐ市民の阿鼻叫喚が聞こえてくる

学校のリサイクル活動に家族で参加し

子どもたちへの褒美にパフェに来たのだ
突然行進が止まった

むこうに渡れない

休日が真つ二つに割れ

弾んでいたところがこっぱみじんになる

先頭でなにが起こっているのだろう

軍部の威嚇デモンストレーションか

反対派の牛歩戦術による横断か

昔、けんかねぶたが出会った橋のあたりだ

テロ報復は局部戦争を引き起こす

もう

三沢の米軍基地からハイジャックされ

むつの原燃施設に特攻されそうだ

空はおびえる

狂ったジェットとキノコ雲に

子連れの弱犬は

空に向かってしわがれた声で吠え

そくさくと路地裏に逃げる
卑怯の尾を垂らして

こわばり

ノケサレノケサレ

大国が弱国に総攻撃を加えようとするとき
体外受精で異人種が生まれていた
アアモウダメカモウダメカ

ノケサレノケサレズツトサレ

ついに人類がウイルスを創造したとき
すでに世界の人々は飢えきついていた
アアモウダメカモウダメカ

アアドウシヨウドウシヨウ

クローン人間が餌を探している間に

異物が瘤をなし創造主の体内を突き破る

人口臓器など役立たない科学技術は間に合わない

瘤は肉体から天へと伸びていく

アアドウシヨウドウシヨウモナイ

治療手段 自然？

そんなものあっただろうか

避難場所 環境？

すべて一方的に呑みこまれているのだ

ドウシヨ―モナイシヨウガナイカクゴシカナイ

瘤はジャックの豆の木のようにぐんぐん伸びる

サア サア

きのご雲のように傘をひろげた

サアッ

放射！

新たな地球劇場の誕生

ウィルスに巣くわれた人間たちは

瞬時に化石となつてごろごろ転がる

朝も夕映え

朝露の刈田遠く山際の白い太陽

だが 大地の斜陽かのように幻覚する

昇ったはずの太陽が沈み込み

すべてが黄昏てしまうのは

生への無気力と知覚の鈍化ゆえか

テロ 紛争 そして戦争

希望に反して世界が勝手に進む

砂漠の太陽は何を見ているのか

難民の子どもたちが飢えている

檜の落ち葉が舗装した歩道を埋めつくし

黄褐色の波が眩しく夕映えを誘う

朝なのに ころはわくら葉となり

すべての風景がひわだ色にくすむのは
滅びゆくものへの雷同ゆえか

公務員 議会 そして首長

心情を斬り住民を無視した私欲が暴走する

平野の河川は何を流していたのか

日々の幸福がむしばまれていく

狂った世界の残照

病んだ世の中の反照

いつのまにこれほどの重荷を背負っていたのか

私欲という多額の地方債 莫大な戦争国債

真面目に生きていたのに 誰が

共犯の意識が自らの生きがいを遮る

いっそ 朽ち葉となって朝焼けに燃え尽し

住民の手に 難民の肌

取られる暖になりたい

共産されうる原始の地と風に帰還するのだ

冷血

それまで降雪もなく過ごしやすい冬だった

だがずっと 安逸ゆえの不安がこびりついていた

純白な浅い積雪の聖夜 無信仰な家族が礼拝堂で賛美歌を聴いた

帰り路 古色蒼然とした街灯がじろっと睨んだ不吉な揺らぎ

降誕祭になると 来る日も来る日も降る降る降る

起床を早めても大雪に車が渋滞し 焦り遅刻に胸が絞めつけられ

勤務であるようなないような除雪に 手首と腰を痛め虚脱に陥る

嘲るように降ってくるこの白さは いったい何なのだろう

どうなったのだろう 予測をはるかに超えた異常気象とし死者

日本の上空を流れた北のジェット気流が

湿った亜熱帯のパイナップル・エクस्प्रेसと衝突

カリフォルニア全体に大雨が猛襲する

洪水、地すべり、建造物の破壊、そして山脈に多量の降雪

同時期 猛烈に渦巻く冬嵐が北ヨーロッパを襲う

激しい降雨にある町は水没した 十四人死亡

前の月は夥しい洪水だった

マレーシア半島東岸十一人死亡 イラン海岸線二十八人死亡
フィリピンのルソン島千人以上死亡 なのにイラク戦争など

人間たちに対する怒りの爆発か 地震がついに洪水と協働し

スマトラ島沖を巨大地震が襲い 国際的リゾートを大津波が急襲

地球にとってどの地域だろうが問題ではない

十六万人もの痛ましい傷痕を残す死体 なのに奢れる戦争など

日本はいまだ大雪が続く

空を失った白濁の曇天は 息苦しく閉ざされた硝子瓶の中

すぐ頭上から降ってくる雪は 白い血のようだ

地球の凍えた涙か 心臓が破裂し飛び散った冷たい血の破片か
確かに 私たちはすでに 現代文明によって破壊されていた

【嘆きと希望】

—— 自省の嘆き ——

雪、雪、雪

屋根にしんしんと降る

久しくあどけない太陽を忘れていた

庭先にビュービューと吹きつける

とうにロマンスが漂う花を見ていない

玄関先でこんこんと降り積もる

封圧された今、覆われた地面の土は凍てついたまま

はい雪を見上げながら

こんなにいっぱい雪を

環境の危うい今

自然エネルギーに変えられないものか

深刻に空想しても

何も浮かばない

どうせ、地球のリズムを壊すことになろう

しまり雪の靴音が脳まで響く

何が無駄骨なのかわからないまま

玄関の雪を庭に積み上げて除雪し

屋根の雪降ろしも庭に落とす

棄てられた雪の山は堂々として

家主の標識の役割を奪う

一日何度除雪しても

朝に玄関前でこんこんと降り積もっている

深夜も昼にもビュービューと吹きつける

静かになったと思うや、しんしんと降り続けていた

君は一粒でも六花の結晶を成したか

せめて

降雪の呼びかけに応え

積雪のつぶやきに耳を澄ます

それは

季節の死

いつまでも溶けることのない

凍りついた君の死

落葉のため息

夜長の朝まだき

蛍光灯もパソコンも点けっぱなし

窓のカーテンを引くと

たわわになった林檎の影

はれぼったい瞼に充血した目

ルーペで辞書を確認する

誤記から逃れようと必死に校正

内臓に重い疲れを感じながら

頭も疲れた

でも 第一短編集

紙上に受賞者が発表されていた
授賞式と詩祭が行われるという

応募していた

歯牙にもかからなかつたろう

名誉欲なぞ

そう嘯いて 意気消沈する

仲間に 出版社に出す顔がなく

妻子を引きずったかもしねない

恥じは

焦って種を蒔いた自分だけにしよう

実は稔らなかつた

葉っぱだらけのへっほこ詩人

いや 柱ごよみをめくるただのヒト

裏山の紅葉に慰めを求めて

黄色い葉っぱのあざやかさ

束の間のうわべだけでもいい

目をさませるような林間

子どもらは杖を木刀に戯れる

妻を杖にもう一度尾根に向かおう

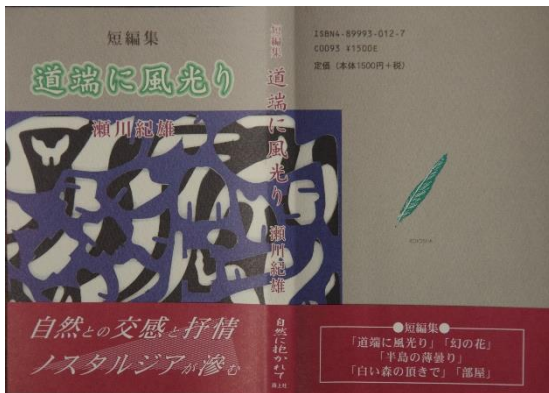
痩せ枯れた言葉だけであっても

落葉 落選 気落ち

脳の枯れ葉はとうに剥がれ

こころも落ち葉となって

地面からも遠くゆらゆらと



形而上学的誘惑

悲しみ悩むとき

自分の深淵が幽かにうごめいてくる

何することなく無聊に長く浸されるとき

自己の存在が自らを問いただしてくる

世の人々の誰にも知られぬ一人の人間

深過ぎる孤独感

何一つ知らぬ広大な世界に石つころのような一個の物

生命は剥奪され寂寥感がコーンと響く

宇宙の塵としてその位置さえ消えうせてしまうのだろうか

どうせ存在しないも同様なら

せめて思考の仮像にでも生きたい

事物を見聞きしても何も語ってくれないから

その背後を勝手に探るしか術がない

いや、そうさせられるのだ

なぜ と問うのは理由をではない
無知ゆえの目的論的な問いなのだ

私の背後には何があるのだろうか

生活史 社会的背景 家系

そして歴史 人類史 地球史

銀河の誕生からビッグバンまで遡行して

いったい何が見えるのだろうか

私はなぜ在るのか

自分自身のためか

家族 親族 地域のためか

それとも器官 組織 細胞

そして利己的な遺伝子のためか

私はなぜ在るのだろうか

執拗な同じ問いから倦厭しながらも逃れえず

ついに脳から観念が踊り出て私を飲み込み

私は裏返しになった

ゆらいで

いま どこかで

一瞬 山の石が崩れ

しーんとしているのだろう

あれか これか

揺れながら

また 日が沈む

それさえ見ぬまま

機械的に起き 家を出て

ハンドルの向こうに風色が揺れ

食後の席で まぶたがつつら

帰る時刻も定まらぬまま

柱時計の振り子の周期ではない
せめてもの波の押し寄せでもない
ふわりふわりと浮雲だろうか

芯がいつしかやわくなり

どこかで半分折れ だらんだらん

もう 頭が落ちるのだろう

こつりと

見えない軸

X軸上は坦々と淡々と年齢が歩く

Y軸上は事柄がかつてに昇り降りする

軸だけに細い言葉となって現れ

わたしは二次平面に浮かんでばかりの仮象

不可逆的な人生

欲があるためのそれが悲劇だった

Y軸の高みはサーカスのような曲芸

吊り人形はすぐ落っこちる

おくゆきにZ軸がみえるか

自己満足度だ

あっても結局二次元

地球からみればしみ

宇宙から笑えば点にもならぬ

もうひとつの軸

他者への貢献度だろうか

複素軸かもしれない

ああ 原点ははるか

這いつくばりつづけ

はしっこに手がとどく

無業者の名

シャルル・フリードリッヒ・エマーソン・フォン・セルゲーヴィッチ・
フェデリーコ・デ・フランチェスコ・テイラー・ツテノーリオ

憧れた筆名だった

ペトラルカ コールリッジ エマーソン ボードレール

ニーチェ ソロヴィヨフ ロルカ

だから 名前に名前をつけたかった

クルル・クリードリッヒ・リバーソン・フォン・バヤゲーヴィッチ・

ヤシリーコ・ツテノーリオ

ぼんくらは いま ただ

せめて 妻の旧姓を名乗る

セガワ・ツテ・ノーリオ

一人娘を娶った罪滅ぼしに

生家を訪れても車を降りなかった

癌の母は最期まで許さなかった

子どもまで生まないなんて

遅すぎたから いま唄っている

あなたの孫たちを

家系が途絶える哀しみを和らげるために

笑いの絶えない 家名を継ぐ孫たちを

いつまでも若い

いつでも優しい

不思議な母

あなたの化身だった

さあ 手をさしのべて 踊ってくれ

下手でもピアノが弾けるから

調子外れでも元気に歌えるから

先にほんとうに逝くのは

私の方だ

そう 最初から名はなかった

唯一 名無しの権兵衛 という代名詞

一回かぎりのちっぽけな命に

何もかも 一回ぎりだった

山も芸術も読書も 感激ほどすぐ消え

地上の広さに比べたなら

種さえ蒔けず 何とはかない

偉大な詩人たちが笑っている

凡人でも死にやみな同じだ

無きに等しい未練なぞ捨てて 早く来い

そこでも 彼らは遠くで背を向け輝いているのだろう

クルル・クリードリツヒ・リバーソン・フォン・バヤゲーヴェイツチ・

ヤシリールコ・ツテノーリオ

畢竟、名は Hoon 無 \wedge \vee i \wedge \vee であるうと

辞書のみ引つ提げ

もう一度 ほんとうのわたしの名を探しに行こう

ちぎれて

蝕んだ枯葉に尺蛾の屍骸

ぼろぼろの翅から最後の鱗粉が浮かんだ

あんなに無邪気だった尺取虫

また蛹になったのだ

存在の すくせ 宿世

臍ほぞの緒が切れて

少年のときは忘れていた

青年になり いつまでも

端をつかみながら待っていた

結ぶものが分からないまま

ようやく妻子に結んだとき

もう ほぐれ出していた
どれほどの養分をそそげるのだろう
根元からちぎれたら
私のかわりに何にくっつけようか
腐乱したものは捨て去るべきか

空からの遺伝子が
地上で反射していった
越冬する地中の卵はだれのものだろう
ちぎれた臍をむすびたい

暗闘

薄暗い朝の凍てついた通勤路が灰色に浮く

衝突事故で路傍に投げ出された事

前に男が立っていた

額から真つ赤な血を幾筋も垂れ流し

道路反対側の相手の潰れた車を見つめる

前を走っていた車に従い 私は黙って通過する

数日前の苦みが襲う

休日に次男を眼科から送っている親心のとぎだつた

追跡してきたパトカーに呼び止められる

踏切で一時停止しなかったのだ

急発進した前の車につられたのだった

背後の席に次男がいる

ここに何かがどっと追突してきた

踏切だけは少年のときのまま

だから 詩情を呼び起こすのだろう

次男が幼い頃

電車が来ないかと故意に長く停車していた

進化する電車とコンピュータ化する自動車

激突するとどれほど恐ろしいことが生じるだろう

社会に乗れず 人生にぼさつとなると

すべてに価値が見出せなくなる

知恵が智慧に代わって道具となつては操作となり

暖かく抱え込む思いやりが刃金に固まる

せめて ところを魂として抜き放ちたい

すべてがぶつかりあい

どこかで無人宇宙船が破裂し

赤色巨星がもろく崩壊する

広大で非在の宇宙霊がかすかにゆがむ

冬の木

色福せた裸木が密生した林

かつてあれほど美しく感じたブナの二次林

憔悴しきった現代人の群れのように不気味だ

耳を塞ぎながら虚ろに仰いでは悄然と俯く

あつたはずの大人らしい夢を見上げると

額に初冬の雨が刺し眼が曇る

靴の中まで伝い濡つ足指が冷たい

隣りも そのまた隣りも同じなのだろう

うろ抜きと黙殺から逃れようと藁でもの救いを求め

つかもうと腕を伸ばせば鉋で枝払いされ

踏み台に上がろうとすれば脚を鋸で伐採され

いつまでも葉のない痩せた幹だけの低木

底の感触のないままやち田に足を掬われながら

顔に唾のような泥をはねられた思いを重ね

休日まで死の仮面を被ったまま

挟り出された心を凝視できるか

帰って来たら 四季が去ったように今日はなく

起きるとすぐ 成長が止まるように明日は消えるだろう

夜更けに 揺り椅子の上で木霊が湧き

そこで 時はゆらぎ 空間がねじれ

折れて 存在がこぼれ落ちた

溶体

陽射す壁に 揺れる木々の影

日々の無為に気つき

網膜がほどび 鼓膜がぼらつく

影はちぎれ やがて夕闇に溶けだす

脳がぼろけ 心がしずき

庭も木立も輪郭を消す

闇のなか歯槽が病み また抜歯の重い虚脱感

存在が抜けるのだ

意味が噛み合わず呑み込めず

抵抗力のない体が無数のばい菌に変身する

ファウストの悔恨よりもやるせなく

マンフレッドの苦汁よりも疼き

望みどころかあがなう対象もない

命の赤味 天然の青さなく
混沌の糞尿色 溶解の泥濘色 そして虚無
時間の歯石が人生の歯肉を切り裂く
最初から物体にすぎなかった
敵のいない自爆テロ 爆裂の解放感を
最後の自由を求めて

闇より暗い扁平な甲虫
長い後脚を放ったまま
微動だにせず斜めに昇天していく
巨大な凧のように

影人

ずっと自分の影を見ていない

存在の部分でありながら

鏡像でないもうひとつの全体

背に溜まりへばりついているのか

せむしとなってすくむ

空か透き通るほど

ますます背伸びできない

太陽と何ものかに縛られているのだ

影になつたいま

慰めは雨

夜が待ち遠しい

夕日に街角で折られ

いっそのこと空間に溶けてしまいたい
日没とともに地球の陰にもどり
そこから宇宙に帰るのだ

だが

真昼の独房に幽閉され

影さえ引きずることのない足は

ひとりであとずさりする

宇宙へでも地球へでもない

深夜の自室

壁紙に映る偽り

電燈が揺れると揺らぐ影法師

アンニユイ

倦怠は死に至る病か

遍歴を重ねず 霊地を研がず

ふにゃふにゃと机の上で溶けていく

晩秋も立ち去った窓辺

へばりついた枯葉の裏毛がかすみ

時雨の音も聞きとれない

すべての映像も音響も捨て

イリユージョン

そのイリユージョンに倦み

想像が枯れる

最初から なにもなかった

初冬を待ちうける玄関のチャイム

手紙に礼をつくす余暇をつくれず

パソコンに打つべき閃きも訪れない



ひとつとの触れ合いもこころの和みも投げ
ひたすら生きること

その生きることにあぐね

余命が露と化す

いつも なにもも来なかつた

壁が押し寄せてくる季節の壊れた隅

叶わぬ勉強意欲が無残にはみ出て

潰れた苦汁の痕跡が染み入る

書物を破きパソコンを踏んづけ

ひたすら精神世界

その精神世界にへばり

思考が消えた

どこにも 糧は生まれない

パラパラと日々の生活のページをめくる

愛を地にうずめ 命を風に流し

この人生は日記にもならなかつた

古く中途半端でも

風に乗って文字が世界の空をまたがり

近代の黎明を称え未来を詠った鉛筆

こころの襞深くまで浸透していた

でもいま こどものときだけ握る

たばこの吸殻のように

まだ使えるのに大人になると捨てた

爆風に上体の一部が吹き飛ばされたように

車に下肢を轢きつぶされたように

映像から想像の苦しみであっても

いつか目の当りに受難するだろう

自爆車のようなもの 報復テロのようなものによって
そのとき ペンさえもなく

なおさらに いま下腹部の腸が痛くよじれる

とこしえに白髪の文明批判者か

永遠に若い反戦詩人か

誰かがふいに机に伏して

使い古した鉛筆がころがった

拾おうとする骨だらけな自分の手

とうに芯も折れたこの鉛筆

利便性も力もいらぬ

もう一度 平等という素朴のナイフで削って

煙草の端をつまむリストラ失業者の同胞となり

リサイクルの意味だけではない

最後の芯まで舐め尽くすのだ

書きなぐるものが

白紙でもない空であつても

動きだけは残るだろう

届かず実らぬメッセーじだろうが

無差別な爆弾よ 自然もろとも破壊するな

科学技術の詰まった砲弾よ 自由を吹っ飛ばすな

文明の利器 銃弾よ 人々の博愛をちりぢりにするな

老いて駆け出した負い目を背負いながら

旧套で二番煎じでも

白痴な同語反復でも

書いては消し書いては消し

空にさらに穴をあける

先つちよが異次元へ突き破るまで

実在も本質も貫いて

そこに悪しき人煙のないほんとうの空があるだろう

短い鉛筆で書きなぐる中途半端な

ならどうすると反問される答え

シシュポスの途上

それでも

そこに平和な空が見えるかもしれない

霧の中

濃霧の尾根筋をとぼとぼと
家族の濡れた絆を重くして
地吹雪きの中を歩くような
砂漠の上に残されたような

すべて仮像かもしれない日常に

一、遊び 二、習い事 三、自然教室

まだ子犬のよう体をふるふる素早くふるわせ

霞も霧も季節を問わず晴れあがって

一、生徒会 二、部活動 三、学習塾

青春に向かって随意筋がびくびく動き出す

緊張と不安の煙霧がこころをよぎり

一、仕事 二、家事

子育ての母性だけはまだ残っている

臉に靄がかかりはじめても

○、仕事

疲れることさえ忘れた

ころの中は霧だらけ 精神は濃霧の中

透明なページが重なっては消える

方角もなく浮いたように

霧の親子

歳とともにすが関れて

どれほど先にあるのか白い紙に

せて足跡の一点を描こうと

妻子に肌をくつつけエネルギーをもらう

霧の人生を とぼとぼと歩む

どうせ先が見えないから

踏み外して隠された爆裂火口に落ちようと

すぐ上の雨雲に投げ葬られようと

壁の分厚いカプセルにかわりはない

ときどき遠くに 雷鳴の笑いか慰めか

明るくきらきらする空隙がちらつく

儂く不毛でも 霧の人生を歩むのだ

かすかに手の甲に濡れを感じながら

風の花

風のない鎮まった夜
遅く帰った自室にぼつねんと
やがて 何もない重みがのしかかる
もつと軽やかな自由を

花の散る悲しみを知っているのは
風だった

散る前に旅立たせるのだ
そして みずからも

静かに風が咲く
花びらは白く 透明

ゆつくりと 宇宙のように膨張していく
見えない波紋を 誰が肌にとらえるのか

花粉が幻想に乗って離れあつていき
子房は夢に膨れながら次第に消えていく
ほつんとそこに 種子が残った
新しくも 古い小宇宙

ぼくはそこに住んでいた
残された風紋を 風と
せいっぱい追いかけるとき
なぜか 無性に太古を思い出す

ぼくがいつか 風となつて
銀河へ開いていくとき
悲しむ人の悲しみがつらい
だからまず眸に吹いて悲しみを流してやろう

ぼくの種も もう半人前の風になつていた
目の前にたくさんの壁がはだかつている

ぼくにはもう打ち砕く力がないから
せめて 星からもととの風を送ってやろう

銀河の花がひろがって 宇宙の花となり

幾重にも重なるがゆえに透明に澄み

だからこそ 風であり

ここにも咲くことを伝えるために

無の風

雪に覆われ 溶け水だらけの暗い地
頬をくっつけ這いつくばるうちに

風に風が吹き

気だけが残った空を さらなる空か包む

インフレーション宇宙

そのとき 知覚は生じたか

先カンブリア紀

そのとき 意識は生まれたか

いつ頃のことだろう

意識を意識できたとき

人類は不幸を知った

宿世の不幸から逃れるために

正義を定め それを成すことに生涯を尽くし

真理を打ち立て それを探すことに忙殺され
そして 美を想い その創造に酔いしれようと
だが 模倣さえできなかつた
疲れだけが残された

もう 原初のおのれに回帰しよう

土よ 腿まで盛り上がれ 私は植物

雨よ 臍腑まで降れ 私は種子

風よ 肺まで吹け 私は分子

そう 星の光よ 心を燃やせ 素粒子にもどるのだ

すぐまた山背が襲い

野分だって木枯しすさみ吹雪き続けるのだろう

春暁を覚えずそのままに

彼岸へ夢の気をつなぐ

背の温もり

人影少ない早朝の肌寒い街路

街灯に連ねた紅葉祭の華飾だけ鮮やかに
貸店舗と空店舗が並びひっそりと

時空が進んでいるのに私も停止したまま
通勤の車窓に現実という虚像が映りゆく

十字路に向け緩やかにカーブすると決まって
歩道に風が舞いあの老婦人が現れる

こんな方がおられたのだと思うほど高貴に
どの先に向かつてか軽快な足取りで

目映いばかりの美貌と永遠の若さを放つ
通学自転車も鞆を持つ背広も生き生きと映る

郵便局の角を曲がってバイパスに出ると時々

街路樹の下をあつた壮年美男子が散歩している
彼は知つてゐる 演劇人だ 健康のためだと
粋な風姿でまわりの空気を爽やかにする
ホテルとマンションの隙間だらけの街に
明るい空を開き朝日がすうつと広がつていく

起業なく高密度文明から外れた寒宵の古都
たつた二人の輝きに後押しされながら
桜並木を平野を走破し滅私ずるため県部へ

裏山の自然に自己存在のルーツを問い
在らるる実存を深めようと

街の展示会の絵や音楽発表に学びながら
彼ら街の人を 人間を知らなかつた

三百年前からの幾多の交響曲を聴き 精神に
壮大なメタ・シンフォニーを奏でようと

六百年前からの数多の絵画を視て 宇宙に
広大なメタ・タブローを描こうとしてきた

だがいまだ 最初の音符を選びかね

パレットには一色もねり出していない

そう 人間を 知らないのだ

その内なるシンフォニーとタブローを

古都だからこそ残っているのだろう

従前の巫山 在来の温かい心 純真な創造

まもなく路面は真っ白になる

その前に街の人に出会うために帰って来よう

初出概要

当詩集は、二〇〇一年から二〇〇五年までの五年間に発表した六十二編による。藤森里美主宰の詩誌『ゆすりか』に三十編ほど、加藤忠昌主宰の詩誌「風」に十編、青森県詩人連盟刊行の『青森県詩集』と『岬』に七編と、同人として所属しているところが主な発表の場である。他に日本詩人クラブ刊行の『日本現代詩選』、芳賀清一編集発行の『Meros』や街の新聞やタウン誌などに掲載されたものも含む。

なお、二〇〇一年からの年度別発表（一部作成年を含む）詩数は凡そ十五、十七、十、十、十となつている。詩集としての詩の配列順序は、発表順を基準にしながら、内容的に存在と認識、人間と芸術、自省自覚の観点から見出しと小見出しをつけて内容が類似したものを一応まとめている。そして見出しから詩集のタイトルを得た。写真は詩作となった場の、その時の写真である。

表紙の写真は二〇〇五年の上高地から焼岳家族登山の時のものであり、裏表紙の写真は二〇〇三年の那須岳家族登山の時のものである。

あとがき

二〇二六年四月五日

二〇〇一年七月に初めて詩集を上梓した。上梓の前後は詩作に乗っていたといえよう。二〇〇〇年代の前半は、一九五一年生まれの小生の五十代の前半に当たる。

次男も小学生になり、皆で身近な野山を歩いては、二〇〇〇年に草津本白根山を訪れて以来、年ごとに美ヶ原・霧ヶ峰高原、蓼科山、蔵王連峰、那須岳、木曾御岳山、上高地の焼岳と家族登山をした。子供たちは久渡寺山の「こどもの森」自然教室に参加していて、キャンプの他に父兄同伴可で冬山登山もできた。家族にとつて、どこか皆で旅行するのが一番の楽しみであったるか。わが家の旅行先は気軽に登れる山が中心だった。

また、私立大学教務課事務員で自然環境教育学専攻を含む大学院担当であり、野外実習にもしばしば参加でき、院生と一緒に学ぶことができた。

そのように自然によく接していたが、残念ながら直接的に野山に関する詩は極めて少ない。山はエッセイや短編で書くべきものと思っていた。にもかかわらず、それなりに詩を書けたのは同人誌二誌および詩団体二カ所に所属していたからであろう。いやそれ以上に、でき次第自分のホームページにすぐ発表できたのが一番かもしれない。同様に読書の方もすぐ感想を発表できたからであろう。詩作は宇宙を考慮した世界認識と自らの人生行路の自省という文学的なものとみなしていた。その一実践としての野山行きでもあったが。

瀬川紀雄

一九五一年 青森県平川市生まれ

弘前高校（三年次早々文学を趣味に）、弘前大学人文学部文学科卒

ホームページ「シエカの風」（1997～）、facebook & blog（2012～）

詩集『石ころの詩』（水星社、2001）

写真詩集『命たちの輝き』（KDP 出版、2025）『風景に命と人』（KDP 出版、2026）

ウェブ詩集『さようなら命たち』『儂くも生の尊厳』『野山と海辺』

『高嶺と湿原』『池畔と川辺』『自然と芸術』

ネット詩集『自省から逍遙へ』『儂くも一日一詩』『若き日の探求』

短編集『道端に風光り』（路上社、2002）ウェブ短編集『春の蝶と花鳥』

詩誌「ゆすりか」元同人（2001～2019）

詩誌「風」（同人 2002～、編集 2010～、発行 2017～）

自作詩朗読の夕べ「麗日の会」会員（2014～）

文芸誌「無名群」同人（2016～）

俳句・短歌各グループに所属（2017～）俳句誌「千青」に時々執筆（2019～）

青森県詩人連盟（2001～、2018 理事・事務局長～2023）

日本詩人クラブ会員（2002～）弘前ペンクラブ会員（2008～、現在常任理事）

弘前大学哲学懇話会会員（2016～）



写真詩集『風景に命と人』 瀬川紀雄

風詩社